

+

ぶかつ
物語

科学技術部

三重高校・中学(三重県松阪市)

ホームグラウンドは、三重県松阪市の松名瀬干潟。海に面する前浜干潟、櫛田川の河口干潟、浜の内陸側にできた潟湖干潟がそろって伊勢湾でも希少な海岸で、ラムサール条約への登録をめざす動きもある。高度成長期に埋め立てを免れ、潮干狩りや海水浴シーズンには親子連れなどでにぎわう。

この干潟へ部員たちは、大潮の日の干潮を狙って毎月1度、学校から10分近くを自転車で行って生物調査を続けている。中学生は50分四方に区切った砂地を掘り、貝類やカニなど小生物の個体数や体長の推移を記録する。高校生はマーキングした貝類が干潟内を移動する様子を追っている。

干潟の保全へ生物調査

2005年に創部した。現部員は高校生13人と中学生20人。顧問の教諭は、生物が専門の小西伴尚教諭(41)のほか、化学2人と数学1人の計4人。

部員のほとんどは中高一貫教育で入学した生徒で、6年間活動する。研究テーマとして森林などを選ぶ部員もいるが、大半は干潟。高校生は後輩の指導や三重大学との共同研究、日本貝類学会での発表などのテーマが次々と与えられる。活動は週4日。生物室で、干潟から持ち帰ったデータを分析し、まとめる。

山本洋輝部長(高校3年)は、干潟に多く生息していたフトヘナタリという貝が12年の堤防の改修を境に激減し、ヘナタリという貝が増えた調査結果を学会で発表した。「人工的な影響で、貝類の生息環境が変わった例。具体的な分析や対策は後輩に委ねることになるだろうが、地道な調査の積み重ねの大切さを実感できた」と話す。

干潟の生物調査は6年目になる。顧問の小西教諭は、干潟保全のために「松阪・松名瀬海岸再発見プロジェクト」を立ち上げ、三重大学や行政、漁協とも情報交換しながら、海岸清掃を続けている。企業などの依頼で開く干潟観察イベントでは、部員たちが準備して講師を務める。環境省主催のシンポジウムのパネリストに部員が招かれたこともある。

松名瀬はアサリなどの貴重な漁場で、渡り鳥の飛来地でもある。ただアサリの漁獲量は近年大幅に減り、原因は特定できていないという。小西教諭は「部員には干潟が地元の宝であることや一見、地味なデータ取りの作業の大切さを教えていきたい」と話している。(本井宏人)



松名瀬干潟で生物調査をする部員たち。今年で6年目になる＝三重県松阪市